

量はどちらかといえば腔上皮細胞グリコゲン量と密接な関係がみられる。

(4) エストロゲンが腔内容を改善することは周知の事實であるが、演者は腔疾患患者にエストロゲンを投与した場合2〜5萬單位投与後に腔上皮細胞グリコゲン量が増量し同時に或いは1〜2日後にデーデルライン桿菌の出現乃至増量をみた。

(5) エストロゲンのみならず、カルバギン錠又はペニシリン坐薬の局所應用によつても腔上皮細胞グリコゲン量は増加し、グリコゲン増量と同時或いはこれにやゝ遅れてデーデルライン桿菌が出現してくる。

(6) グリコゲン含有の液体培地若しくは固形培地を使つて腔内細菌の培養を行つたがグリコゲン分解能のある細菌は見出されなかつた。従つてカルバギン錠又はペニシリン坐薬等の抗菌剤による腔清浄度の改善は腔上皮細胞グリコゲン量の増加によるものであるが、之は腔上皮の代謝生成に對して抗ホルモ的に作用する細菌の滅滅に因るものと思われ、この場合のグリコペニーが細菌の產生するグリコゲン分解酵素によるグリコゲンの破壊に基くものとは考えられない。

以上の成績を要約するに、腔自浄作用はデーデルライン桿菌、腔上皮細胞グリコゲン及び腔液中の淨化酵素の三者が密接に關係し、腔内容の改善は腔上皮細胞グリコゲン量の増加を前提とする點より考へれば、腔自浄作用の根源をなすものはエストロゲンの作用であつて腔上皮細胞グリコゲンが腔自浄作用の根幹をなすものと思われる。

24. 新生児眼脂の細菌學的研究 (第1報)

(盛岡赤十字病院)

菊池 俊雄

高橋 岸郎、曾根 久、佐藤 龍也

(岩大細菌) 小川 誠、大平 新治

妊婦の腔細菌叢の研究によれば、妊娠により卵胞ホルモンが非妊時より多量に分泌され、腔桿菌の發育は極めて好都合となるが、他方分泌物増加の爲、前庭、陰裂の濕潤を來し、その部の細菌はむしろ増加傾向を示し、此等細菌は羊水流出により、一時著しく減少し一方腔内は羊水の爲アルカリ性となり腔桿菌の消失、雑菌の繁殖を招來すると云はれている。

我々は此の様な條件にある産道を通過して來た新生児60例に就いて眼脂の細菌學的研究を行ひ新生児結膜炎の豫防治療に就いて考究したいと思ふ。尙腔内細菌叢に關する研究に就いては昭和27年10月、日本細菌學會、東

北部會に報告した所である。

實驗方法

(a) 材料 新生児眼脂 (Créde 氏點眼を行はず)

(b) 材料採取時間 分娩直後 4, 8, 12, 16, 20, 24 各時間毎、生後第 2, 4, 6, 8 日目毎に新生児内眥より白金耳で採取、血液寒天 (人血) 培養と共に Objektglas に塗抹染色檢鏡せり。

(c) 血液寒天上の發生集落を分離し生物學的檢索を行へり。

實驗成績

60例の檢索結果によれば、桿菌並びに双球菌最も多く見られ、白血球・上皮細胞をも認めることが出來た。且つ細菌は上皮中に認め得るものが多かつた。これらの所見は分娩直後、4 時間目、遅くも 6〜8 時間目頃に出現し 16 時間前後又はそれ以後に多い。又非病原性スピロヘータを認めたものもあつた。

細菌の出現率は約 50% を示し、これと臨床症狀とはその症狀に輕重の差こそあれ關係を認めた。出現細菌と白血球との關係は次の如し。

但し白血球はほとんど全例に於て分娩後 2〜8 時間頃より多小の差はあれ認めた。

① 白血球の出現を認め細菌を認めざる者 53.1% (臨床症狀のある者も含む)

② 白血球の出現を認め同時に細菌を認め得たもの 46.9%

培養成績は次の如し。

① 眼脂塗抹檢鏡により細菌を認めざりしものに於ても、桿菌 (主に Döderlein), 球菌 (主に Entelococcen) を認めた。

② 眼脂塗抹檢鏡により細菌を認めた者も①同様の所見である。

結 論

60例の新生児眼脂の細菌學的檢索によつて、ほとんど大多數の眼脂中に、さきに我々が證明した腔内細菌と同様なる Döderlein, Entelococcen を認めた。臨床症狀は必發とは云へぬが Entelococcen が重大な關係があると思はれる。

25. クルーケンベルグ氏腫瘍に對する一知見に就て

(新潟坂町) 遠山秀雄、(慈大) 児玉 清

クルーケンベルグ氏腫瘍の 兩側性 或は片側性に就ては、從來から種々論議されて來た處であるが演題提出者

昭和28年3月10日

の1人兒玉は對側卵巢が肉眼的正常形態を示すク氏腫瘍剖検例4例を蒐集し、其正常形態を示す卵巢の連續切片を作成、精細に追究の結果何れも卵巢門周邊部に未だ腫瘍化を示さない癌細胞集團を發見し、兩側性、片側性の問題は一にかゝつて時期的關係にあると結論するに致つた。今回演者遠山に依つて更に1例の追加を得たのでこれを報告する。

磯〇フ〇エ (31歳)

臨床診斷名 右側卵巢囊腫

初診 昭和27年10月20日

入院 昭和27年12月26日

手術 昭和27年12月26日

死亡剖検 昭和28年1月9日

家族歴 特記する疾患はない。

現症 手拳大の硬き腫瘍で、左側卵巢は正常。

剖検 腹水なし

胃部 1. 幽門部に於て、超鷄卵大、硬固なる腫瘍があり、其壁は肥厚状、粘膜面は、ほぼ胃街に一致して、約5×3cm不正圓形狀の噴火口状をなし、邊緣は突隆状、其底は比較的清淨であるが、一部に小出血點を認む。漿膜面は灰白色大體滑澤であるが、小彎側に於て脾臓と中等度に癒着を認める。

2. 胃の他部は厚さ其他正常と認められるが粘膜面はカタル性炎の像が認められる。

3. 胃周圍淋巴腺は數個小指頭大に腫大し硬固子宮 兩側附屬器を伴へる全剔子にして、鷄卵大、右圓韌帶附着部に網膜の一部癒着の外正常

右卵巢 超鷄卵大、表面灰白色やゝ凹凸不平癒着なし、硬度は弾力性やゝ硬 一部に囊胞様部を認む。切剖面一部被膜に接して小鷄卵大の單房性囊胞を認め、囊胞壁の内面は滑澤他部灰白黄色、膠樣感が與へられる。

左卵巢 指頭大、正常形態と認められ表面滑澤癒着なく、切割するに數個の小囊胞を認めるの外所見なし。

26. 不妊症に於ける所謂無排卵性月經の意義に就て

(東大) 渡辺 輝彦

原因不明な不妊婦人に於ける所謂無排卵性月經の頻度は、英米では30~54%の高率と云はれているが、余が當科外來を訪れた斯の如き症例199例に就き、月經前期

子宮内膜の組織検査に依り證明し得たその頻度は次表の如くである。

	總數	無排卵性月經例數	%
子宮卵管造影術所見 上兩側卵管が共に通過性のもの	106	5	4.7
同上片側のみ通過性	17	1	5.9
同上 兩側共に閉鎖性 器 結 核 症	48 28	2	4.2

即ち内膜検査又は内膜、頸管、陰分泌物等の培養に依り性器結核症と診斷された28例を除く171例中、無排卵性月經は8例(4.7%)であり、子宮卵管造影術所見とその頻度との間には一定關係は見られず、更に兩側卵管が共に通過性、且つ精液所見も正常な42例では1例(2.4%)、兩側卵管には異常が無いが精液が無精子症である21例では1例(4.8%)で、孰れにしても英米に比し遙かに低率であることを知つた。尙發見された8例中4例に就き次回周期を検した結果は、3例は正常周期であり、1例は2回に亘り無排卵性周期を呈した後正常周期を示した。

其他エストロゲン投與に依る本症の發現、人工妊娠中絶後に於ける本症の頻發等に就ても報告する。

27. ビトシナーゼに関する知見補遺(第1報)

(東大) 金沢 太郎

妊娠時母体血液殊に血清中に腦下垂体後葉性子宮收縮因子 Oxytocic Principle (O.P.) に拮抗する所謂 Pitocinase 又は Oxytocinase が出現する事は、Fekete (1930) 以來知られており、本物質が一種の酵素である事に關しては米、獨の學者により異論は無いが、その本体に關しては猶不明な點が少なく、殊に Werle (1950) により認められた赤血球 Pitocinase 及び之を阻止する物質に關しては本邦に於て未だ實驗報告をみない。余は妊娠各月の妊婦、種々な患者、男子及び非妊婦等の血清並びに血球其他各種臟器抽出液等に就き本物質を定量し、二・三の知見を得たので以下之を報告する。

實驗方法

この種の實驗には從來専ら海狗剔除子宮が用いられたが、種々の點で適當でないので、余は1951年熊谷氏等により發表された白鼠剔除子宮低温法を用いて實驗を行った。即ち東大産婦人科外來を訪れた正常妊婦15名につき、毎月1回定期的に採血し、その血清ならびに血球につき各月における本物質の絶対値をうかゞう事にした。